

まごころ 18周年のご報告



日本列島を南から縦断していた桜は東北・北海道を残すのみとなりました。

去年の今頃は初めて体験する緊急事態宣言の真ただ中でした。そして、この騒動がこんなに長期にわたって私たちの生活に影響を及ぼすとは思ってもいませんでした。

少し前まで当たり前と思っていた生活が一変してしまいました。私は4年前にほぼ同時に2つの癌が見つかり、1つは手術でもう1つは抗がん剤で治療し、治療後の経過観察は大阪の病院で受けています。大阪と富山を行ったり来たりでしたが、体調が回復するにつれて大阪で新たな活動を始め、月に2~3度大阪と魚津を往復するようになりました。ところが、大阪のコロナ感染拡大により、往來自粛が求められ、更に魚津に戻っても潜伏期間の2週間は自宅待機という、私にとっては動きの取れない時間が増えるようになりました。そんな中でワクチン接種が始まりました。まだ副反応などの課題が残る中での開始ですが、こ

の窮屈な生活に一日も早くピリオドが打たれることを願っています。

さて、2003年に開所したまごころは今年3月1日で18周年を迎えました。

開所当時、魚津には病院をバックに持つ大きな介護施設がいくつもあり、小さな寺を母体とするまごころの開所は無謀だと思われていました。それが、多くの人や利用者の方々に支えられ、18年目を迎えることが出来ました。ありがとうございました。

この間、2016年にはまごころ分家を開所。分家を地域交流の拠点とし、住み慣れた場所で最期まで過ごせる街づくりを目指してきました。社会も人の思いも変わるけれど、『住み慣れた地域で、最期まで』という『在宅への思い』はこれからも待ち続けたいと思っています。

東京大学の名誉教授の上野千鶴子さんはある座談会で『富山型は第三ステージに入った。第一ステージは「開拓期」第二ステージは「成長期」そして今は第三ステージ「成熟期」である。成熟期とは成長が止まった状態。そんな時には、より甘く、よりおいしくするための工夫が必要になってくる。そしてまたその実を絶やさないように継承していくことも考えなければならない難しい時期だ』と言っています。

社会も人の思いも変わっていく中で、まごころが存続してくためには、社会や人の変化に対応しながらより甘く、よりおいしくするための工夫が必要だということです。それと同時に、施設としてのまごころとそこに込められた『在宅を守る』という思いを絶やさず継承していくことが大切だと。

難しい課題です。しかし、18年前無謀だと言われながら開所し、ここまでやってきたまごころです。これからも皆さんの力を借りながら地域に根付いていきたいと思っています。

今までありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

【左上の写真は18周年のお祝いに、このゆびと〜まれの惣万さん西村さんから贈られた花かごです。『18周年おめでとうございます。笑顔いっぱいのまごころが大好きです』と書かれています。】